平成27年度「宮崎大学教員教育活動表彰」表彰者のFD/SD研修会における講演発表の概要

宮崎大学FD専門委員会　委員長
白上　努

平成27年度、「宮崎大学職員表彰規程」第8条に基づき、職務上特に顕著な業績をあげた者のうち、教育活動に優れた業績をあげた教員を表彰する「宮崎大学教員教育活動表彰」が制定された。この制度は、表彰された教員の教授法や教育実践を本学の教員が共有化することで、教育の改善および質の向上を図ることを目的としている。そのため、教員教育活動表彰実施要項には、「被表彰者は、優れた教育活動の共有化を図るため、公開授業やFD研究会等での報告を積極的に行うものとする。」と記されている。このような背景から、FD専門委員会では、平成28年度第2回FD/SD研修会において、「教育改善～教育力を高める～」というテーマで、初代表彰者5名の教員による講演会を企画し、平成28年12月1日、本学創立330記念交流会館コンベンションホールにて実施した。ここでは、本学教員への情報発信という観点から、その時に発表された講演内容の概要を記載している。なお、関周一准教授（教育学部）および白上努教授（工学部）の講演内容については、実践報告の方に記載されている。是非、一読して頂き、今後の教育改善および質の向上に向けた取り組みの参考にして頂きたい。

佐藤　克明先生（医学部　医学科　感染症学講座免疫学分野）の発表
「医学教育の中の免疫学～免疫：医学のかなめ～」の概要

FD/SD研修会では、医学教育の中の「免疫学」の意義とはという視点に立って、なぜ、臨床医になるために基礎専門科目の「免疫学」を習得しなければならないのか？という医学生の疑問を解決するために、筆者が担当する「免疫：生体防御学講義」を通して、その教育方針および教育の工夫が述べられた。教育の方針としては、免疫学は専門用語が多く、体系的に複雑で難解な学問であるという特徴を念頭に、充分な理解が選られうる明確な目的と到達目標を掲げたシラバスの作成を実践している。また懇切丁寧な解説を心がけ、対話形式で進める躍動感ある授業を通じて、基礎免疫学および将来の臨床に繋がる臨床免疫学の面白さと必要性を伝えている。教育の工夫としては、“オリジナル講義テキスト”を作成し、受講者全員に配布すると共に、PDFファイルもダウンロードできるようにしている。複雑な免疫反応や免疫関連疾患の解説には、身近な例を通じて平易な語句を用いてわかりやすく説明している。また、共用試験(CBT: Computer Based Testing)の免疫学分野対策として講義の理解度の評価として筆記試験を課している。さらに、普段の学生生活、基礎配属ならびに講義を通じて学生とのコミュニケーションを積極的に図り、学生との信頼関係を築く努力もしている。学生からの授業評価では、約9割の学生が満足できるとの回答が得られ、非常に多くの学生が医学生として免疫学の重要性を認識して講義に望んでいるという記載もあり、筆者が念頭においている、医学教育の中の「免疫学」の意義が学生に浸透していると思われる。今後も、学生からの評価を顧みると共に、教育効果の高い丁寧な事業を実践していくことが重要であることが述べられた。

根岸　裕孝（教育文化学部）の発表
「地域を題材とした実践的な教育について」の概要

FD/SD 研修会では、地域を題材としたアクティブラーニング科目として、基礎教育学士力発展科目である「宮崎県の経済と地域の活性化」と「中小企業と宮崎」の２科目の事例が紹介された。「宮崎県の経済と地域の活性化」科目では、典型的な地方圏である宮崎県の中で、経済および地域再生に向けた取り組みを学ぶことを目的としている。受講生は概ね 50 名であり、フードビジネス、地域再生等を踏まえた５名のゲスト講師による講義も取り入れている。本年度は、「日南市」を一つの柱に７名の日南市の地域活性化に関わる方をゲスト講師として招き、土曜日に現地視察を組み入れることがこの授業の特徴である。参加学生の声からは、現場を見学する、並びに現場の人の声を聞くという作業を通じて、ただ単に講義室内で考えるよりも実感できたとの意見が多かった。基礎教育に現地見学を取り入れるリスクについても言及し、事前学習の充実化、現地との受け入れ体制の構築、交通費等の費用負担および事故やトラブルの可能性等の問題点が挙げられた。「中小企業と宮崎」科目では、宮崎県の中小企業の経営と地域社会における貢献について理解を深めることを目的としている。また、経営者の体験談を通じて自らのキャリア形成のヒントを得たり、インターンシップへの関心を高めたり、宮崎県中小企業家同友会との連携等の狙いもある。2012 年度から 2014 年度までは、経営者をゲスト講師として招き、企業見学会も含めたグループ討議等を実践した。2015 年度には、企業の理解・研究を行うために、５名の学生（学部混合）で構成されたチームで２社を訪問し、最終的には模擬会社説明会を開催するという取り組みを行っている。最後に、地方国立大学にとって、地域を担う人材育成は重要であるという観点から、地域現場を巻き込んだアクティブラーニングが、学生の地域や社会への関わりへの関心を向上させるだけでなく、地域貢献にも寄与していることが述べられた。

大野　和朗先生（農学部　植物生産環境科学科）の発表
「クラスマネージメント～学生は授業に満足している？」の概要

FD/SD 研修会では、農学部専門科目である「基礎生態学」、「昆虫生態学」等の授業科目を通して、筆者の興味深い「教授法」について述べられた。学生に対する教授戦略 (Teaching Strategy) として以下のことが挙げられている。(1) 講義に参加、聴こうという意欲を引き出せているか。(2) 良い成績を取ろうと意欲を引き出せているか。(3) 教えている内容が誤解のない形で伝わっているか。(4)90 分を意味のある時間だと認識できているか。(5) 眠気を感じさせていないか。(6) 講義のリズムは、集中時間と気を抜く時間が準備されているか。(7) メモしやすい形で板書できているか。(8) 講義中に取りかかりの遅い学生が追いつけるチャンスを与えているか。(9) 予習できる、復習を促すような取り組みが用意できているか。以上、9 つの視点が述べられた。これに対して、具体的にどのような教育の工夫がなされているかが述べられた。例えば (3) の項目について、毎回出席票の中で、学生に対して講義の感想・質問を書かせることでチェックしている。また、(5) と (6) の項目に関して、常に、考える作業やメモを取る作業を取り入たり、講義の途中に雑談あるいはインパクトのあるスライドを挿入したりして、講義にはリズムを付けることが大事であるということが述べられた。(9) の項目に関しては、調べる語句やテーマを時々提案したり、次回の講義内容の予告を必ず行うなどのことが述べられた。最後に、新採用された人に対する研修は、どこの企業や自治体でも行っているが、大学では、新採用された教員に対して、講義やクラスマネージメントに関する研修はなく、新採用の教員は自分流の試行錯誤で講義を実施していることが述べられ、新採用の教員に対するこのような研修会の必要性ならびに指導できる教員の育成が必要である旨の問題提起がなされた。